

注意に関する個人特性と創造性の関係

A Study of Relationship between Personal Characteristics Related to Attention and Creativity

上田珠生 UEDA Tamaki 2018年度入学 | 工業設計学科 Department of Industrial Design

分類: 卒業研究

作品/論文: 論文

制作年度: 2021年度

課題概要: 人間工学

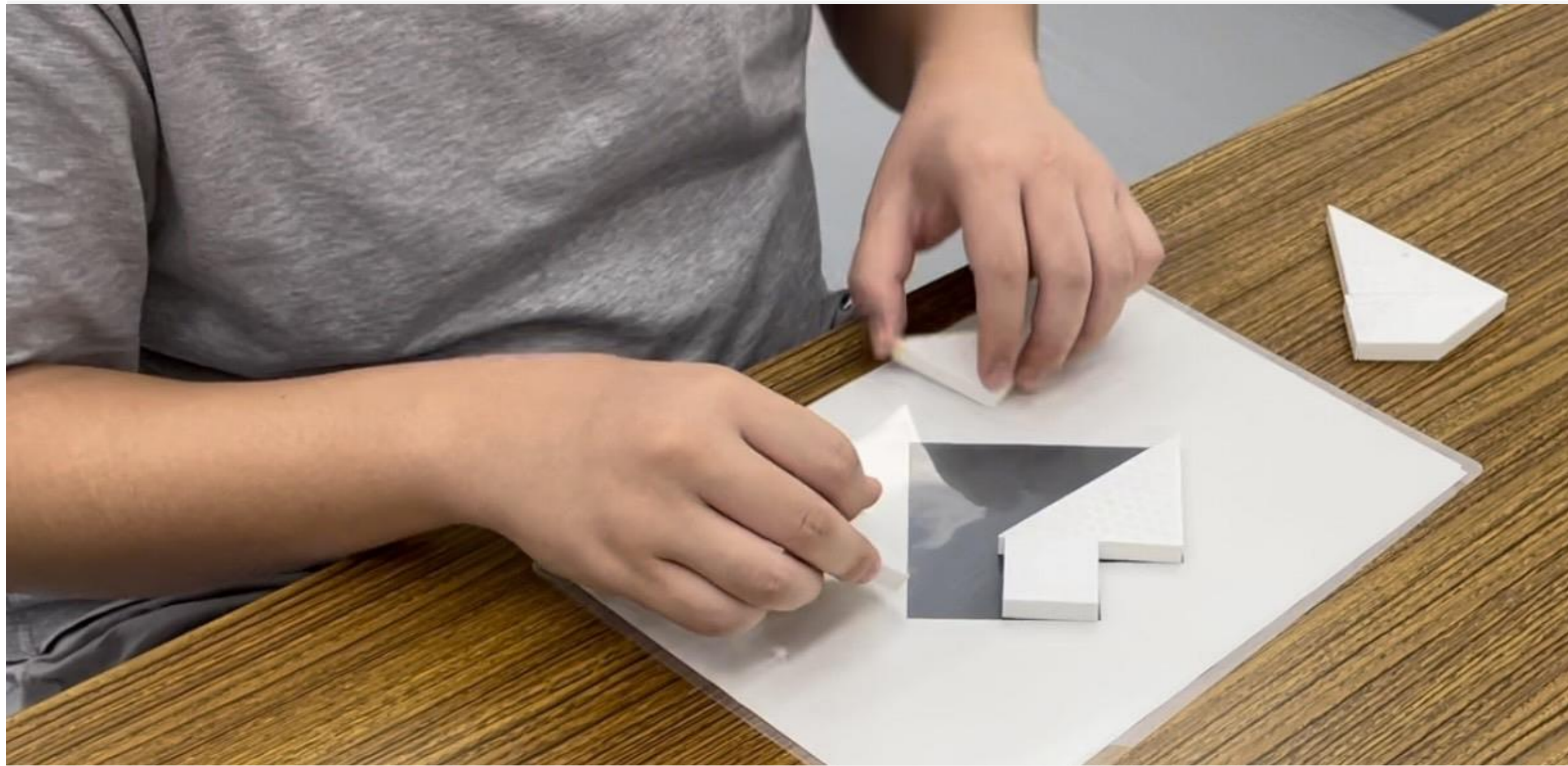


図1 実験風景

過去の研究結果から、注意に関する個人特性が創造性を促進または抑制する要因として働き、創造性課題の種類によっても関連が異なることが示唆される。そこで本研究では、過去に検討されていない新規の創造性課題による評価指標を用い、各個人特性が創造性に与える影響を新しい側面から検討することを目的とした。

実験参加者は若年男性27名(事前実験の参加者46名の中から選出)とした。事前実験は各被験者の自宅で行い、本実験は実験室にて下記の個人特性に関する質問紙調査と創造性課題を実施した。

・マインドワンダリング: Daydream Frequency Scale, Mind-Wandering Questionnaire

・マインドフルネス: Mindful Awareness and Attention Scale

・ADHD: Conners' Adult ADHD Rating Scale

・Divergent Association Task (DAT): 言語的創造性課題として用いた。実験参加者はできるだけ意味や用途の異なる10個の名詞を挙げた。単語間の意味的な距離が大きいほど得点が高いと評価した。

・タングラム課題: 空間的創造性課題として用いた。タングラムのピースを全て用い、指定された二つのシルエットに対して何通りの回答を作成できるかを評価した。

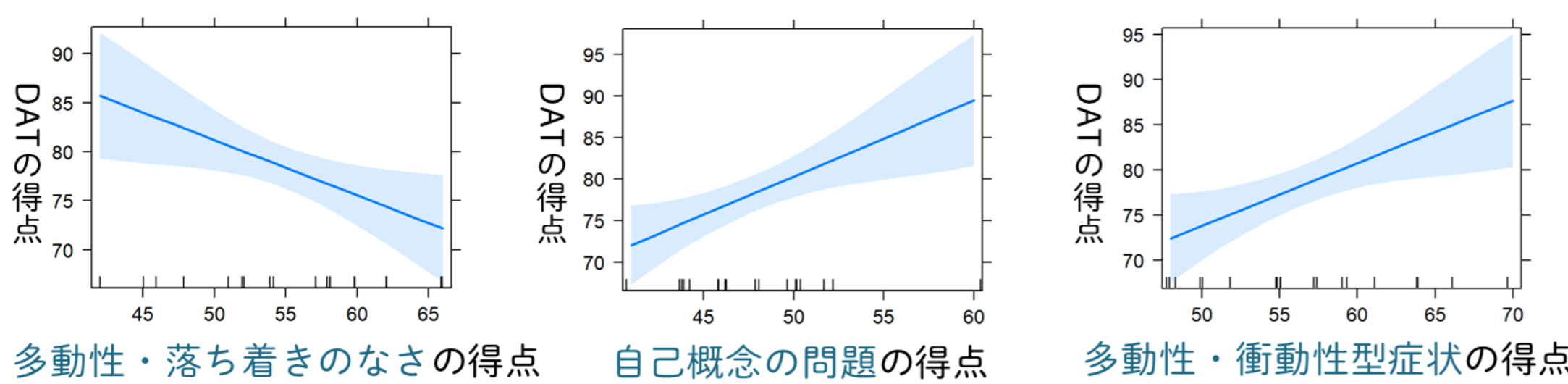
目的変数を創造性課題の各成績、説明変数を各質問紙の得点とし、ステップワイズ法を用いて変数選択を行ったモデルによって各質問紙の得点と創造性課題の成績の関係を検討した。選択された変数間の関係について検討を行うために、目的変数をDAT得点、説明変数と媒介変数を質問紙の得点として媒介分析を追加で行った。

多動性・落ち着きのなさと同動性・衝動性型症状について、媒介分析の結果から、これらに共通する多動性の要素はDAT得点に対して負に、衝動性の要素は正に影響することが考えられる。先行研究で、創造的な活動を行う際の気分の高揚が衝動性につながり、大胆な制作を行うことが創造性に影響を与えると述べられている。DATにおいて、衝動性の高い人が大胆な発想によって高得点を取ることができた可能性がある。

自己概念の問題(自尊心が低い、自信がない)は、精神病性や神経症傾向と正の関係がある。精神病性が高い人は創造性課題の独創性の要素において高い評価を得ており、これは型破りな思考に由来すると考えられている。さらに、神経症傾向が高い人は問題を考えこむ傾向が高いため、創造的な問題解決能力が高いと考えられている。自己概念の問題の高い人は精神病性や神経症傾向が高い可能性があるため、型破りな思考を発揮したり、問題を熟考したりすることによって二つの創造性課題で優れた結果を示したのではないかと考える。

DAT

- ・多動性・落ち着きのなさ (ADHD) は有意な負の効果を示した
- ・自己概念の問題 (ADHD)、多動性・衝動性型症状 (ADHD) は有意な正の効果を示した



タングラム課題

- ・自己概念の問題は正の効果が有意な傾向を示した

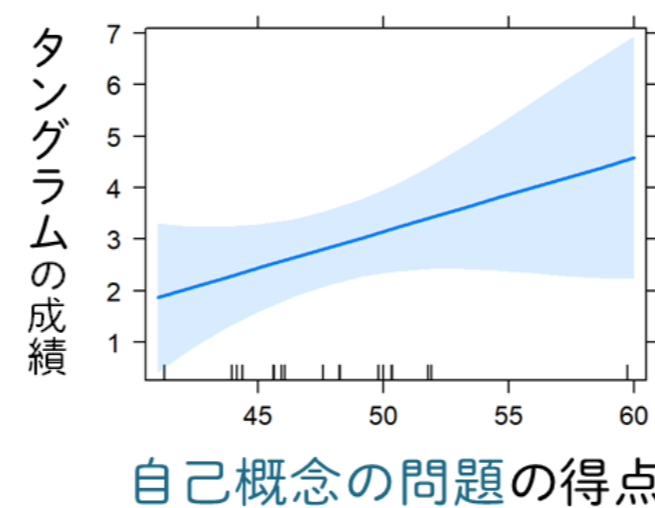
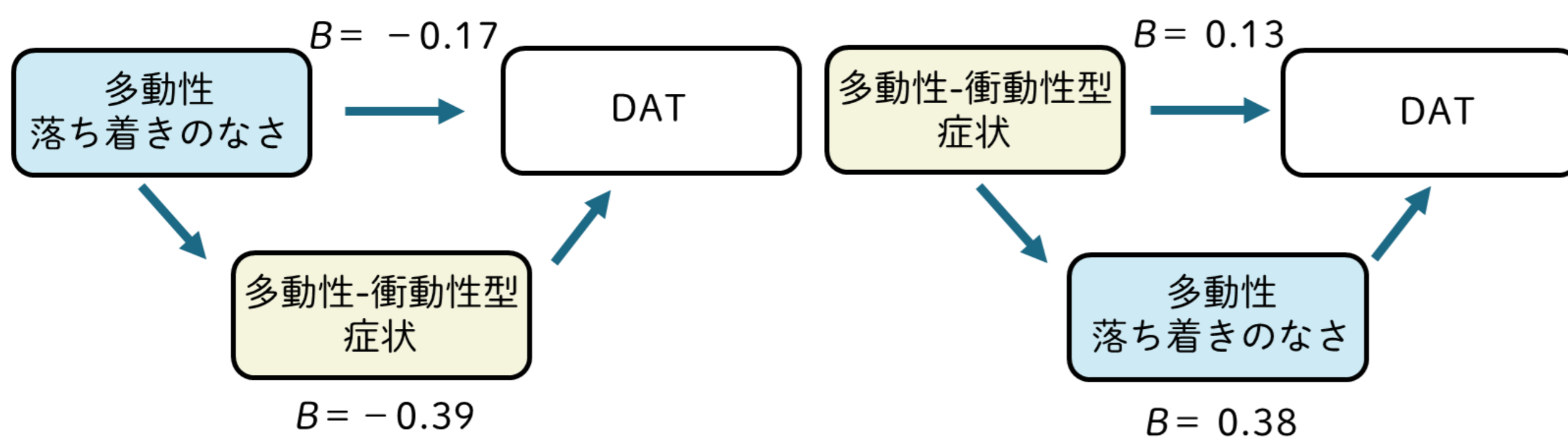


図2 重回帰分析の結果



DATで、多動性・落ち着きのなさの負の効果は多動性・衝動性型症状を統制すると大きくなり、多動性・衝動性型症状の正の効果は多動性・落ち着きのなさを統制すると大きくなった

多動性は負の影響、衝動性は正の影響を与えたことが示唆される

図3 媒介分析の結果